

審議会等の会議結果報告

1. 会 議 名	松阪市子ども・子育て会議(第 30 回)
2. 開 催 日 時	令和 4 年 8 月 12 日(金)午後 6 時 00 分から午後 8 時 20 分
3. 開 催 場 所	松阪市産業振興センター3階 研修ホール
4. 出席者氏名	<p>委員 ◎山口昌澄、○澁谷裕子、森小百合、鈴木寛子、前田江梨子、加藤亜由美、鈴木エリ子、鈴木邦夫、塩谷明美、高島清子、濱田壽々子、辻木慎吾、竹内令子</p> <p>(◎会長・○副会長)</p> <p>事務局 谷中靖彦こども局長、北川顕宏こども支援課長、堀口理絵子子育て給付金担当主幹、山岡恵こども係長、小坂純一郎こども係主任、大野千賀子こども未来課長、加藤知孝幼稚園保育園担当監、三田歩保育幼稚園係長、井村智美保育指導担当監、近藤奈央子保育主導主任、鯖戸静香保育指導主任</p>
5. 公開及び非公開	公 開
6. 傍 聴 者 数	1 人
7. 担 当	<p>松阪市殿町 1340 番地 1 健康福祉部こども局こども支援課</p> <p>担当者:堀口、山岡、小坂</p> <p>電 話: 0598-53-4081 FAX: 0598-26-9113</p> <p>e-mail: koshien.div@city.matsusaka.mie.jp</p>

事項

1. 開会
2. こども局長あいさつ
3. 子ども・子育て会議 会長あいさつ
4. 議事
 - (1)「松阪市幼稚園・保育園あり方基本方針」に基づく休園ロードマップについて
5. その他

議事録

別紙「松阪市子ども・子育て会議(第 30 回)議事録」のとおり

松阪市子ども・子育て会議(第30回)議事録

日 時:令和4年8月12日(金)18:00~20:20

場 所:産業振興センター3階 研修ホール

出席委員:山口昌澄、澁谷裕子、森小百合、鈴木寛子、前田江梨子、加藤亜由美、鈴木エリ子、鈴木邦夫、塩谷明美、高島清子、濱田壽々子、辻木慎吾、竹内令子

欠席委員:大橋信、木許千賀、村林雅紀、尾崎佳広

事務局:谷中靖彦こども局長、北川顕宏こども支援課長、堀口理絵子子育て給付金担当主幹、山岡恵こども係長、小坂純一郎こども係主任、大野千賀子こども未来課長、加藤知孝幼稚園保育園担当監、三田歩保育幼稚園係長、井村智美保育指導担当監、近藤奈央子保育主導主任、鯖戸静香保育指導主任

配布資料:

- ・第30回松阪市子ども・子育て会議事項書
- ・松阪市立幼稚園・保育園あり方基本方針
- ・松阪市立幼稚園のあり方に関する答申
- ・松阪市立幼稚園整備計画
- ・阿坂幼稚園、港幼稚園での説明会における経過
- ・松阪市立幼稚園の入園状況
- ・松阪市の子ども状況
- ・住民基本台帳に基づく校区別人口統計表

[議事録]

1. <開会>

2. こども局長あいさつ

皆さん、こんばんは。先月末に第29回の子ども・子育て会議を開催させていただきまして、その後2週間、またお盆前というこの時期での開催にも関わらず、公私ともにお忙しい中ご参加いただきましてありがとうございます。また、平素は松阪市の子ども子育て支援につきまして、それぞれの各分野でご尽力をいただいておりますことを、この場をお借りしまして、厚く御礼を申し上げます。

さて、本日ご協議をお願いしたい案件につきましては、前回事務局の方から説明させていただきましたが、今年度に入り公立幼稚園の閉園に向けての取り組みを行っております。その経過等につきましてはこの後こども未来課長より説明をさせていただきますが、閉園に向けての道筋がない中で進めているところで、色々なご意見をいただいております。私どもといたしましても、ある一定のロードマップを示す中で、閉園に向けての取り組みを進めていきたいと考えておりますので、忌憚のないご意見をいただければ幸いです。

以上、簡単ではございますが、引き続き皆様方からのご支援ご協力をお願いいたしまして、冒頭のあいさつとさせていただきます。よろしくお願いいたします。

3. 子ども・子育て会議 会長あいさつ

それでは皆さん、こんばんは。本日はご多用の中ご臨席賜りまして誠にありがとうございます。今回は、といつてもつい先日までございましたが、私の不慣れな点もありまして、皆様のお考えを十分にすくいあげることが出来たのか、いささか不安が残るところでございます。それぞれのお立場、様々な見識から点検評価をいただきご意見も賜りました。色々な事業が展開されているなかで、報告書の文面のデータとか数値とかそういうところで表せないところ、例えば園の先生方の働き方はこうだとか、子どもさんの気持ちは、保護者の気持ちはっていうところを会議の中でなるべくすくいにとって、それを市の方へ届けていく、そのように媒介するという重要な役割がこの会議にはあるのではないかということを再認識したところでございます。本日の会議ですが、「松阪市立幼稚園・保育園あり方基本方針」に基づく休園ロードマップと題されており、また説明があるかと思いますが、それを受けて一市民として、或いは親として、それから現場からみてどうなのか、いずれも子どもの育ちを最大限に考えて、かつ子育ての機微というものをなるべくすくいあげ、市の方へお届けしたいというような趣旨で今回も皆様からお力添えをいただくことになるかと思っております。よろしくお願いいたします。

4. 議事事項

「松阪市立幼稚園・保育園のあり方基本方針」に基づく休園ロードマップについて

会長

それでは第30回、今年度としては第2回目となりますが、松阪市子ども・子育て会議を事項書に基づいて進めさせていただきます。この会議は、松阪市の「審議会等会議の公開に関する指針及び運用方針」に基づき原則公開となっております。不慣れな点多々ございますが、スムーズに会議が運びますよう、皆様のお力添えをよろしくお願いいたします。それでは早速でございますが事項書の4. 議事(1)「松阪市立幼稚園・保育園あり方基本方針」に基づく休園ロードマップについて事務局の方からご説明をお願いします。

事務局

本日は大変お忙しい中、子ども子育て会議にご出席いただき誠にありがとうございます。資料に沿って説明の方をさせていただきます。

資料「松阪市の子どもの状況」をご覧ください。松阪市の就学前の子どもの状況を説明させていただきます。左の表をご覧ください。令和4年は6,744人で5年前の平成30年の7,636人から892人減少しています。右のグラフでも毎年右肩下がりで減少していることがわかります。次に2ページの入園状況についてをご覧ください。保育園の入園状況は平成25年4,140人から令和4年4,038人と横ばいで推移しており、大きな変化はございません。一方、公立幼稚園は平成25年1,323人に対し令和4年627人と10年前に比べて696人減少し半分以下になっている状況です。令和3年の719人からも約100人減少している状況でございます。3歳から5歳の子どものうち、公立幼稚園に入園している子どもの割合ですが、平成30年度は24%でしたが、令和4年度は17%になっており、このことから現在公立幼稚園に通っている子どもの数が減少していることがわかります。以上が松阪市の現在の就学前の子どもの状況でございます。

夕刊三重等の新聞報道でご存じかと思いますが、令和4年4月1日現在で総園児数が15人未

満となった園について閉園する方針を説明しているところです。資料「松阪市立幼稚園の入園状況」をご覧ください。伊勢寺幼稚園、阿坂幼稚園、港幼稚園は令和4年4月1日時点で15人未満の園となっており、閉園対象となります。大石幼稚園は8人ですが、みなみ保育園と統合して認定こども園にするという方向性が出されていますので、現在閉園の対象とはなっていません。伊勢寺幼稚園、阿坂幼稚園はともに15人未満で、あり方基本方針に基づいた場合は、両幼稚園が閉園対象となりますが、両方を閉園しますと西中学校区に配置されている園が松江幼稚園のみとなります。松江幼稚園は現在空きが少ないため、人口規模の大きい伊勢寺幼稚園を残して阿坂幼稚園を閉園という考えで整理し、閉園の対象は阿坂幼稚園と港幼稚園の2園としました。

続きまして、休園基準を15人未満とした経過の説明をさせていただきます。平成22年1月、保護者のニーズや市内の園児数が減少している状況を踏まえ、幼稚園の適正規模や休園基準等を検討委員会で検討・協議を重ね、平成23年の3月に松阪市立幼稚園のあり方に関する答申を作成しました。資料「松阪市立幼稚園のあり方に関する答申」の4ページ、5ページをご覧ください。③幼稚園の適正配置として、1園あたりの適正規模を概ね75人程度から100人を超えない規模とし、安全面や教育の質の向上、地域のニーズを考えあわせると中学校区で1～2園に整備することが適正であると考え、また、6ページ④休園・統合基準として、集団としての教育効果や教育の質の向上の面からも総園児数が15人未満となった場合には、保護者および地域住民と十分協議を行う必要があるとされました。以上のことをうけて、平成25年3月に松阪市教育委員会が松阪市立幼稚園整備計画を策定しました。資料「松阪市立幼稚園整備計画」の6ページをご覧ください。松阪市立幼稚園整備に関する基本的な考え方として、中学校区に1～2園に整備していくこと、総園児数が15人未満となった場合には協議を行う必要があることが示されました。幼稚園の所管が教育委員会からこども未来課に移った後も、当時の松阪市立幼稚園整備に関する基本的な考え方を踏襲した形で策定された「松阪市立幼稚園・保育園のあり方基本方針」でその方向性を示させていただいています。この考えのもと、阿坂幼稚園、港幼稚園において地域住民を対象に説明会を開催し、閉園についての方向性を説明させていただきました。

資料「阿坂幼稚園、港幼稚園での説明会における経過」をご覧ください。これまで2回開催した説明会の経過としては、第1回開催(阿坂地区6月13日、港地区6月14日)の説明会では、来年度の新規入園募集を停止し、閉園日を令和7年3月末との方向性を提示しました。それに対し住民からの主な意見としては、「唐突すぎる」、「あり方基本方針では『閉園基準を満たす園については休園・閉園及び統廃合を検討していく』とあり、検討段階である」、「幼稚園整備計画には総園児数が15人未満となった場合には協議を行う必要があると記載されているにも関わらず、保護者や地域住民との協議を行わず、閉園の結論を打ち出された」、などがありました。第2回開催(阿坂地区7月14日、港地区7月15日)の説明会では、令和5年4月入園の新規募集は実施し、令和5年度以降の4月1日時点で総園児数が15人未満となった場合は、その年度から2年後の年度末をもって閉園、閉園を決定した時点で原則新規入園を停止するという方向性を提示させていただきました。それに対し住民からの主な意見としては、「阿坂地区では独自のリサーチで総園児数が令和5年9人、令和6年17人、令和7年は15人で推移することから経過観察が必要」、「港地区では子どもの人口には浮き沈みがあるので、複数年の経過観察が必要」などの意見がありました。これらを踏まえまして、15人未満の閉園基準は変更せず3年間は様子を見ること、有識者や保護者代表

などで構成される子ども・子育て会議の場で意見を伺い、閉園する場合の道筋を示していく必要があると考えました。次回住民との意見交換の場においては、閉園となる道筋を示していきたいと考えています。

本日議論いただきたい内容としましては、「松阪市立幼稚園・保育園あり方基本方針」に基づく休園ロードマップとして、市から提示させていただく内容である「4月1日時点の入園児総数が、3年連続で閉園基準の15人未満となった場合に、翌年度の新規入園を停止し、停止決定した年の3年後の3月末時点をもって閉園する」との考え方についてでございます。3年という期間設定についてですが、資料「住民基本台帳に基づく校区別人口統計表」をご覧ください。その中で、例えば阿坂小学校区の5歳16人、4歳5人、3歳11人、2歳8人、1歳13人とか、射和小学校区の5歳23人、4歳28人、3歳29人、2歳15人1歳27人、0歳22人といったように、人口には毎年浮き沈みがあります。また、港小学校区は2歳44人、1歳47人、0歳35人というふうに常に30人以上子どもがいる中で、単年度で判断するのではなく、3年は様子を見る必要があると考えたことからであります。

最後に参考として他市の閉園基準を紹介させていただきますと、桑名市では概ね10人以下の園児数が複数年継続した場合は休園とする。四日市市では総園児数が2年連続で15人を下回った場合、次年度の募集を行わないといった基準を令和3年1月に策定しましたが、3歳児保育を実施していないからということにより令和4年2月に撤回し、令和4年中に計画を示すとして保留状態でございます。鈴鹿市では、入園希望を募った結果、園児数が15人未満である場合は休園としています。例えば令和5年4月入園希望を令和4年9月に募集を行った結果15人未満だったら令和5年は休園、ただし休園期間中も募集を行い、15人以上なら開園とのことです。津市では学級の人数が9人を下回った場合は混合クラスとし、さらに減った場合は近隣園との合同保育を実施したうえで、その状況が2年くらい続くと休園等の検討を行うとしているとのことです。

以上が説明となります。

(質疑応答・意見交換)

会長

ありがとうございました。休園に関してはその地域の住民の方々のこれまでの園に対する思いですとか、休園してしまうことへの複雑な感情などあるかと思えます。今、推移とともに数値でご説明いただきました。15名未満という一つの基準、それから経過措置をみる必要があるのではないかと説明会の場での市民の皆様方の声を受けての3年という基準が示されております。合わせて県内他市の状況も説明いただきました。この基準について皆様方のご質問や意見を踏まえて、なかなか難しいとは思いますが、今後のあり方に関しても一つの方向性みたいのところを見出すことが出来ればと思っております。いかがでしょうか。まずは今の説明についてのご質問ですとか、先ほど申し上げました基準についての意見ですとか、そういったところを幅広く、色々な方向からご意見を賜ればと思います。

委員

幼稚園の園長会から代表ということで出させていただいておりますが、園長会の方でも統廃合についてはそれぞれの先生方が様々な意見をお持ちです。私自身、子どもの最善の利益というか、保護者や子どもたちにとって一番良い幼稚園・こども園、松阪市の就学前教育になっていけばと思っております。今日ほどの立場で発言しようかと色々思っていましたがいざ、率直に素直に、自分が考えていることを、この話し合いの中で出せればいいかなと、冒頭の説明を受けて感じたことを少し発言させていただきます。

園長会の中でも同じことを言ったんですが、組合の役員をしていた時に県内とか全国の会議にもたくさん出ていたこともありまして、今日この会議に出るにあたって、県外とかの先生とも少しお話をさせてもらって状況も確認しました。松阪市の場合は、この整備計画をはじめとして、幼稚園をどうしていくかという議論を、本当にこの10年くらい色々な委員会とか会議の場でされてきているように思います。その一方で、大阪の八尾市は平成30年度末に公立幼稚園19園、保育所7園の26園を2年間で閉じて、こども園5園に再編しました。この時マスクミでもすごく取り上げられまして、市長の強いリーダーシップで親御さんのためにわかりやすいこども園にして、待機児童をなくして、3、4、5歳の幼児教育、質の高い幼児教育をすべての市民の子どもに提供するんやということでやられたんですが、反対のデモとか、反対運動が巻き起こりました。そういうところもある中で、松阪市はこういう段階を踏んでやってこられて、恵まれているという語弊がありますが、本当に幼稚園にとっては丁寧に進めてきてもらっているなというふうに私は感じております。ただ、園長会の中でも、先ほど住民からのところであったようなこと、閉園基準を満たす園について、「15人を切った段階で閉園、再編の検討をしていく」というところの文言について、決定じゃなくてそこから検討じゃないのかという発言がありました。それと、保護者や住民の方たちに丁寧にその前に説明すべきであったのではないかなということはあるんですが、でも段階は踏んできているのかなと私は思っております。冒頭そのことをちょっと感じましたので、発言をさせていただきました。

会長

ありがとうございます。他県の状況を色々鑑みても一定のプロセスは踏まえて進めてきている部分はあると、ただ最後の方にありましたように、検討と決定はまた次元が違う話で、そういうところが地元の説明会でも唐突すぎると、もう閉園ありきでというところで、市民の皆様の気持ちの部分も含めてご意見があったのではないかなというところなんです。この基本的な方針というのは以前からも様々な協議を経て今日の基準にも根付いているということで、そういった基準は変わりなくというようなところでありました。協議、検討ってというような部分で経過措置という考え方も出てきたのかなということですね。

委員

先ほどの先生のお話を聞かせていただいて、保護者や地域住民もお話を聞く機会があっても、なかなか自分の脳裏にとどまらずというところがあったのかなと思います。私も色々な会議に出させてもらっていて、実は今、小学校の方の学校規模適正化等検討委員会、20年から3年かけて小中学校のそういった学校の規模は適正か、どういうふうに進めていったらいいかというのを検討する会

議に出させてもらっていて、本当にそれも数年かけてなんです、この松阪市の幼稚園のあり方に関しても長い年月をかけていて、確かに唐突って部分も大変理解できる部分もある一方で、保護者やいろんな方の意見を聞きながら進められているんだらうなというの理解できます。こういう会議の場で一番大事だなと思うのが、やはり何を基準にするかという、子どもたちが一番基準になるのかなと。なかなか未就学児の園児の気持ちをその子に聞いても答えにくいとか、わからないと思うので、大人がその代弁者となって、子どもたちの思いに寄り添っていく努力というのは必要なかなと思います。やはり子どもたちの健やかな育ちを最大限に考えてってところは今日の議論の場でずれてはいけないのかなと考えています。

新聞報道等でも15人未満という数字が表に出てきていますが、私もよく保護者の方からこの数字は一体どこから来ているのだろうという率直な質問を受ける機会がたくさんあります。15人を単純に3学年で割ると、1学年5人という数字になってきて、子どもたちが集団生活を営んでいる中で、色々な経験をしていく中で、適正か非適正かといったときに、必ずしも小規模が非適正ではなくて、そのニーズに応じた幼児教育は、先生方のご努力とか、家庭での努力、地域の方の支えもあって、してもらっていることは間違いないので否定をすることは決してないんですけど、果たしてその数字というのは、子どもたちの貴重な就学前の3年間の中で、本当に適正な数字かというのは、これは本当にすごく難しいことなのかなと。なので、答えというのではないですが、一つの基準として出されていると思うので、幼児教育を施していくうえで、この15人という数字の根拠というか、何をもって幼稚園全体で15人なのか、どれだけの数字があれば子どもたちがいろんな経験や学びが出来るのかなということを教えてもらいたいというのが一つ。あと、今日配布していただいた表をみると、地域によっても子どもの数にばらつきがあって、例えば5歳児が多く、4歳児が0人の場合、卒園すると3歳児が数人だけ残った園に次の年子どもたちが入ってくるのかどうか。やはり子どもたちが異年齢の交流の中で学ばせてもらうことがすごくあるのかなと、年少に入ったときに、年中や年長のお兄ちゃん、お姉ちゃんをみて、こんなふうに育っていきたいなって子どもも思っただらうし、親も親で、こんな風に成長していくのかな、そのために家庭で何かできることがあるのかなと思いつつ3年間過ごし、小学校に上がっていくという中で、その15人という一つの括りというのが、ちょうど均等に各学年に子どもがいるケースや、ちょっと偏っているケースもあって、数だけじゃみえないってところって議論は、せつかくのこういう機会なのでさせてもらいたいと思います。公立幼稚園の魅力であったり、公立幼稚園での幼児教育の魅力であったりということをお伺いして、最終的にはこの数字でどうですかという答えにもっていかなきゃいけないのは間違いないですが、そこに至るまでにそういった議論を深めていって、これからの松阪市を担っていく大事な子どもたちのことに関わってくるので、そういう集団教育から得られる学びであったり、子育て、親育ちであったりとか、そういうことを議論していく場に来たらいいと思いますので、そのあたりもぜひ教えていただけるとありがたいかなと思います。

会長

ありがとうございます。この15という数字の妥当性といえますか、それと幼児教育の量というよりも質といえますか、そういったところへのご意見の提議だったかと理解しています。特に3、4、5歳という年齢段階で、私の発達心理学の観点から申し上げますと、やはり3、4、5歳と上がるうえで社会的

なルールの理解っていうところが一つの発達課題にはなっているということは様々な内外の研究が示しています。ただ、人数が多ければそれは満たせるのかと、そう単純には申し上げられないところもあります。ルールというのも例えば公共心ですとか、思いやりですとかそういったところであると、単純に数の問題ではなくて相手のことを、気持ちを考えてみようかとか、そういった身近な先生方の丁寧なかかわり方、本当はこうしたいと思ったけど、その気持ちはわかるけど、例えばそうしたときに他の子はどう思うかなって一緒に考えて行こうっていうふうなところ、なかなか3歳児ではできないことが徐々に4歳、5歳と心の発達に伴って出来るようになってくると。一方でそこに集団で、皆で、というところが背景として見えてくるのかどうかっていうところも子どもの気持ちといえますか、心の発達においては重要な点ではございます。現場などで子どもたちの姿を間近にご覧になっている先生方がこの場にはいらっしやると思います。15人となると単純に3学年で分けると5人というところで、それで集団というのがギリギリ保てるのかなというふうな見立てがあるかと思いますが、実際に子どもさんの姿をご覧になられていかがですかね、その規模感というか、適正かどうかっていうところですが。まずはご質問があったので事務局から15という数字について改めてどういった根拠でというところを示していただいたうえで、皆様から何かご意見を賜りたいと思います。

事務局

松阪市立幼稚園のあり方に関する答申で、学識経験者や幼稚園の保護者代表の方々が15人という数字を決められましたが、当時それを検討するとき、全国幼児教育研究会というところの中で、教員が望む1学級の幼児数として、3歳児が20人以下、4、5歳児が20人以上、中でも5歳児は25人以上が望ましいという研究があり、当時は4歳、5歳の2学年の保育であったため15人とされたのではないかと考えられます。この中では3～4名のグループが3つ以上できたら集団とみなすことが出来るという考えで15人というのが集団として最低の下限というか、15人未満という数字が出されたと推測されます。ただ当時の資料がなく、こういったことを議論された中で15人という数字が出されたのではないかと考えます。

委員

連続して申し訳ありません。15人というところで均等にすれば5人という集団にはなるという感じですけど、園それぞれのクラス別の人数を見てもらうとわかりますが、きれいにはいかなくて、大石幼稚園は2、2、4、伊勢寺幼稚園は4、6、4、阿坂幼稚園は5、0、8という感じなんですけど、やっぱりその集団というところさっき話がありました。レコーディングされているところで私言うのは自信がないんですが、色々な考え方があると思います。自治会とか地域の方の前で、その園を背負っている園長先生たちは子どもたちとその小規模保育の中でご努力されていることもありますので、なかなか難しんですが、私の個人的な気持ちとしましては、やっぱり子どもたちの集団というのはとても大事な、前提となる環境だと思えます。保育の環境の一番大きな部分じゃないかなと思います。子どもたちにはいろんな性格の子どもがいて、十人十色です。自分の気持ちをパッと出せる子、じっと見ていて本当は言いたいけど横でじっくり考えている子、すぐに友達についていく子、泣いてしまう子、本当にたくさんいろんな子どもがいます。でも3人、5人だと人間関係が出来てしまい、いざこざ

が生まれたり、何かトラブルが生まれたりというのが出来にくいかなというのがあります。やっぱり私たち保育するものとしてこういった人間が育っていく時の一番経験しとかなあかんのが、トラブルであったり、いざこざであったり、自問自答であったり、解決したときに嬉しいとか、友達にありがとうって言ってもらって嬉しいとか、そういういろんなドラマが保育の中で生まれようとするんです。やっぱりある一定の人数、複数いないと起こりません。だから少人数保育をしている幼稚園の先生たちは、聞いた話では自分たちが子どもたちの一員となって、一役二役三役やって、子どものことに突っ込んだり、あえて大人だったり保育者だったら言わないようなことも友達の気持ちを代弁するような形で言ったり、あえて待ってみたり、もう本当に苦労があるということを聞かせてもらいます。やっぱり遊びや生活や行事や色んな中で友達といっぱい摩擦が生まれようと思うと、ある一定の人数はとても大事であると自分自身はそう思っています。子どもたちが少なかったら、大人から見る目線とか視線とか、大人の影響力というのがやっぱりあると思います。30人いるところの先生との距離と、3~5人しかいないところの先生との距離では違います。子どもたちが自分の思いを出したり、逆に隠れてこっそりやろうというのも大事な育つ力です。先生の目を盗んでとか、ここはうまくやろうとやってなることも生まれますのでそういった部分においても集団の人数はても大事かなと思います。それと先ほどの委員のお話にもありましたが、私はこの会議で整理しとくべきは子どもの数が減ってきていること、それと、これからの就学前教育は、幼稚園・保育園・こども園、松阪市としてどういうふうにしていくかということ、それを合わせて考えていかないと、幼稚園の閉園の基準のことだけ考えていてはそこだけになってしまいますので、そこら辺のことも大きく考えていくべきじゃないかなと私は思っています。

会長

ありがとうございました。集団が重要な要素であると、幼稚園教育要領などでも、領域の人間関係でも、葛藤やいざこざ、そういうことを経験して乗り越えていくところが肝要であると示されています。一定以上の集団という規模感が多様な価値観、多様性という言葉も最近ありまして、そういったところをこれからの時代を生き抜いていく子どもたちが寛容性といいますか、様々な考え方を受入れ、価値観の幅を広げることがこれからの子どもの学びとして求められている中で、人間関係が本当に小さい規模ですと固定化されていき、価値観の画一化ということにも傾いていくと。それを踏まえ、一定の集団の規模っていうのは求められるのではないかということでしょうか。また、こども園化の流れというか、その辺も視野に入れながら、この問題を改めて広い視点でとらえるべきだという意見もありました。

委員

先ほどの15人というのは聞かせていただいですごく意味があるのだと思いました。ただ、子どもは地域の中で育つというのも思っていて、その地域の方が関わりながら大きくなるということもすごく大事なことはないかと思えます。港幼稚園でしたら鎌田幼稚園に近いとか、阿坂幼稚園でしたら伊勢寺幼稚園が近いというのはありますが、地図で見たら距離は近いと思いますが、やっぱり違うところであるということが大きいのかなと思います。私どもはファミリーサポートセンター事業とこのをしています、車を乗られないお母さんたちもいらっしゃいます。自転車で遠いところを子ど

もさん送っていらっしゃる方はいるんです。そういう方が今ならいけるところが、閉園になっていけなくなるというのは大変困られるのではないかと感じます。もちろんその基準を設けるということも大切なことですが、子どもをどういうふうに皆でサポートしていくか、必ずしも15人になったからもうやめていいというのではなくて、やっぱり検討というのは必要なのではないかと思います。

委員

先ほどの委員のお話を聞いて、やはり幼稚園単位だけで考えるというよりはその地域に保育園もあるのかどうか、そして大石幼稚園とみなみ保育園は認定こども園に再建してくという形、飯南飯高も認定こども園となっているかと思うのですが、そういうのはほかの地域性の中では考えていないのか。全く幼稚園がなくても保育園がいくつもあるとか、またその逆もあったりというなかで、保育園と幼稚園では入園基準も違ってきますけど、認定こども園としていけばもう少し親御さんたちも入園する園というのが広がるのではないかと。幼稚園だけで中学校区で1~2園というよりは、保育園・幼稚園でどれだけの就学前の保育教育が保障されていくのか、そういうのを地域でも考えてほしいなというふうに思います。

会長

地域で子育てというか、地域で育つこどもたちという、またさらに広い観点からのご意見を受けて、ここ十年以内にこども園化という波が全国であった中で、国の方も幼児教育機関として保育園も幼稚園もみなすんだというところで統一的な認識が示され、保育所保育指針や幼稚園教育要領でも示されたわけで、その中で地域として考えていくと、その中で幼稚園だけを取り出して、非常に狭い視点で捉えるのではなくて、地域で育つんだというところで考えると、保育園、こども園化というのもセットで捉えていくべきではないかというご意見かなと感じました。阿坂幼稚園、港幼稚園の地域ではどうなんでしょうか、保育園はあって十分子どもの育ちを保障できる地域であるのかとか。

委員

私は幼稚園に就職して21年になりますが、1年目、一番最初に先輩、園長先生たちに教えてもらったことは、子どもは地域で育てるということでした。地域の自然であったり、文化であったり、そして地域の方に保育の中に入れていただいて、助けていただいて、子どもたちも地域に出て行ったりと。地域の方の温かさで地域力というか、私たちが同じことを言っても、地域の方に言ってもらったことの方が子どもたちには染みわたって、わかっていくという行事もたくさんありました。ですので、本当は地域に一つ幼稚園をというのは今でもそう思っています。ただ、最近思うのは本当に広いところで考えないといけないなということです。昭和53年の幼稚園児の数が249万8000人でしたが、平成29年には127万人ということで、子どもの数がすごく減っています。松阪市は公立幼稚園が18園ありますけど、他の市町をみると、その人口に見合った数になっていっているのかなと思うくらい、幼稚園の数が減っています。やっぱり子どもたちに与える幼児教育の質とか環境をいかに守っていくかというところで苦渋の決断みたいなのところがあって、反発もあるし、本当は地域に残していったほうがいいとは思いますが、そこは今考える時が来ていると思うんです。子どもの最善の利益、保護者の方のニーズも併せて考えていくために今こういう問題が出てきていると思います。皆さんが本

当に思っていることをたくさん出し合って、一つの方向に向いていくかどうかはわかりませんが、議論を深めていってほしいなと思っています。

委員

保育園の立場の方から考えを少しと思います。この幼稚園でなければならないというニーズ、幼稚園の必要性のニーズというのは保護者さん、地域がどれほど思ってみえるのか、それと、運営的な面に関してトータルバランスが取れるのか、取れるのであれば、なくす必要はないのではないかと感じます。幼稚園の人数が少ないから駄目っていう形ではなく、人数もそうですけど、運営面でもバランスが取れて、その1園が存続する本当の意味っていうものを感じられるかというところに、1園1園の必要性があるのではないかと思います。先ほど幼稚園か保育園かという話がありましたが、小学校に就学していく子どもが保育園と幼稚園と格差があっては駄目なんです。受け入れる小学校に格差のある子どもが入学してきたら先生たちは大変です。なので、幼稚園教育要領、保育所保育指針ともに同じように発達した形で入学していってもらえるようになっていきます。最初から幼稚園に向かっている保護者さんは幼稚園のことをよく理解しているけど、保育園のことをどれだけ理解してもらっているのかという部分、私たちの立場からみると感じる場所もあったりします。保育園も幼稚園も子ども一人一人の発達、成長というものを一番大事にして保育をしていると思います。今、幼稚園の方に通われている場合は時間的にも短いという部分で、少しでも子どもと一緒に過ごしたいと思っている保護者さんもあるかと思います。その場合でも、保育園に入園したとしても短時間保育というものもあって、4時、5時まで保育はいらないのであれば、短時間保育を選んでいただけるシステムが出来ています。保育園のシステムにも幅広く対応できる状況がありますので、幼稚園と保育園をどうこうというよりも、本当に運営のバランスが取れるのであれば必要、残していてもいいのかなと思います。これは私の園での出来事ですが、平成4年松ヶ崎地域では松ヶ崎小学校に併設された幼稚園がありました。なので、保育園を4歳で卒園していくわけです。保育園には5歳児が0人という状況がありました。しかし社会の情勢も変わってきて、お母さん方も働く方が多くなって保育園の利用者が増えてくると、幼稚園にうつるお母さんが4人になりました。4人のお母さん方がどうしようかと迷いが出てきたときに当時の教育長が見学に来て、幼稚園にいかれて、4人で集団生活は送れないということで地域にある保育園にと相談に来られたことを覚えています。そういったように、何が子どもにいちばん大事か、子どもにとっての最大の利益を与えるにはどのように方向性を向いていけば一番いいのかというところを、いろんな立場の方が考えていくことかなと思います。だから地域にあるものを残したいという単純な思いだけではなくて、何が子どもにとって必要かというところに重点的な加担を置いた方が良いのではないかなと感じています。

会長

幼稚園も保育園も就学前の育ちを保障するという点では同等であるという前提のうえで、議論対象となっている幼稚園の地域でのニーズですとか、運用面でのバランスはどうなのかというご指摘だったと思います。

委員

私は幼稚園の仕事を目指したとき、自分の中で幼稚園と保育園は違うものだと思っていました。平成30年に幼児教育の部分に差があってはいけないということで改定されましたが、それまでは幼稚園教育要領と保育所保育指針は整合性が取れていなかったし、保護者のニーズも違うと思っていました。17～18年前に全国大会の会議で、幼稚園が14時までの短い保育時間なのは子どもたちが集中できる時間、体力等を考えてのことであって、そのあとは親御さんと子どもさんが触れ合ってもらう時間が持てる社会を目指してほしいと発言しました。その発言に対して来賓で来ていた自治労の書記長さんに、現実として仕事をしていて子どもたちを1時間でも2時間でも長く預かってほしいという保護者の方の声にはどう応えていきますか、目の前にそういう人たちがいたらその方たちを救わないと、その方たちが子どもたちを預けられるキャパシティが今足りていないから、そこをやっぱり増やしていかなければならないのではないですかということを言われました。その後幼稚園の方は預かり保育という議論が出てきました。合併前から嬉野4園はやっていましたので、嬉野以外の幼稚園も預かり保育してほしいという保護者の声に応えたい、幼稚園に預けたい保護者がバイトやパートの時間を気にせず安心して働いてもらえるようにできないかなと組合の方でもそのような活動をしてきました。今こういう状況になりまして、やっぱり幼稚園を残すとか、幼稚園と保育園は違うんだ、とかではなくて、保育園も幼稚園も小学校に行くまでにいろいろな経験を保障していくところは変わりなく、一緒に考えていく時期が来ていると思います。その中で、お互いの主張や施策を話し合っていくのが大事なのかなと思っています。

委員

私の子どもは三雲北幼稚園に通っていましたが、三雲北幼稚園は三雲北保育園との合築園舎になっています。今度認定こども園になるということで、先生方を中心にごく前向きにどうすれば子どもたちの健やかな学びに向かっていけるかというのを協働して行ってもらっているという話を会長会とか情報交換会とかで聞かせてもらっています。そういう報告を聞く中で、幼稚園の保護者は幼稚園のことしか知らない、幼稚園のことすらも知らない、保育園のことも知らなければ、こども園のことも知らない、松阪市のこれから目指す就学前の教育についてなかなか知る機会が少なく、乏しかったということを知り、自分自身も改めて反省するところであるのかなと思っています。やっぱり知るためには、与えてもらうことも大事だけど、自ら知っていくということも保護者の務めであるし、こども局長やこども未来課長に、松阪市の方向性を話してもらったときに、わからないことはどんどん聞いて学ばせてもらうことで、こども園ってすごく素敵だと気付いたりもします。自分の子どもも幼稚園にはいたけれど、思い出を聞くと幼稚園のことだけではなくて、保育園さんとの交流、夕涼み会とか運動会とか一緒にさせてもらったことだったり、小学校に上がったら一緒にクラスで遊べるねと話したりしたことを覚えています。やっぱり就学前っていう全体の中で、いろんな立場の方が考えていけるといいのかなというのが保護者の方からもいただいた意見でした。その後上がっていく小中学校についても、今コミュニティスクールが設置されて、地域で子どもを育てようという原点に戻って、地域の方に支えられています。もう保幼小中、子どもの15歳の春に向けて、子どもたちの健やかな育ちにはどうしたらよいかというのを議論していかないと、本当のコミュニティスクールの意味はない、要は小学校からではなく就学前から、小学校単位ではなく、中学校で一緒になる地域全体

で議論をすることが大事になってくるのかなと思います。10年ひと昔といいますが、ここ10年で本当に変わってきていて、子どもたちが生きていく社会も想像がつかない、どんな職業が待っているのかもわからない時代が目の前に来ている、本当にそれだけ変わっていくという状況を受け入れたうえで、やっぱりより良く変えていくことも大事なのかなと思います。会議の中で松阪市全部こども園にならないのですかと質問された方もみえましたが、この地域は幼稚園が残って、この地域はどうしてこども園になるのかというのがわからない方も多いですし、この会議の委員さんの中にもいらっしゃるかもしれないので、この機会にそういう方向性的なものをお示しいただければまた議論が深まっていくのではないのでしょうか、阿坂幼稚園や港幼稚園の地域性のことも含めて具体的に話していくにしても、そういった概略的な部分を事務局の方から少しお示しいただければと思います。

事務局

まずは松阪市の保育園幼稚園全ての状況ですけど、私立保育園が15園、小規模保育園が1園です。公立保育園は分園を入れて18園。飯南飯高地区については、もともと町時代から幼稚園はなく、就学前の幼児教育を受けるためには保護者が仕事をして保育園に預けるという状況でした。飯南飯高地区の3つの保育園は定員の半分しか入っておりませんでしたので、空き部分を使って保育所型の認定こども園として令和2年度から始めさせていただいています。公立幼稚園は18園ありますが、旧松阪市の全体の分布をみると、保育園は市街地、幼稚園は郊外の方にある園がほとんどです。三雲については公立が2園、三雲北と南に幼稚園と保育園があつて、私立の保育園が1園、嬉野については私立保育園が2園、公立保育園が1園と幼稚園が4園あります。来年から認定こども園になりますけど、方向性については、今日資料として配布させていただいた「松阪市立幼稚園・保育園あり方基本方針」の27ページで挙げさせてもらっています。今現在、松阪市の3歳以上の子どもで行くと、私立保育園はほぼ定員いっぱい入っていますが、公立保育園については全体の8割も入っていない状況です。幼稚園については、表の通りで、定員に近い、ある程度入っているのが鎌田、松江、花岡、中川、三雲南というような状況です。その中で市の考えとしましては、今ある保育園と幼稚園を近いところについては認定こども園化にしていきたいと考えています。予定されているのは豊田幼稚園とひかり保育園ですし、射和幼稚園、つばな保育園、松尾幼稚園、大河内保育園は、将来的に認定こども園という方向を示しているように、やはり地域の中で、近いところの幼稚園と保育園を統合していくという考え方であり、新たに幼稚園を認定こども園にするとか、保育園を認定こども園にするかという、そういう方向性ではなく、幼稚園についてはある程度幼稚園に近いところで再編統合して集団を形成できるようにしていく方向としています。今回の阿坂、港につきましても、地域住民への説明会の中で、ほとんどの方が反対される中で、一体誰のためにやるのかと聞かれました。その時に私が答えたのは、子どものためですと、はっきり言わせていただきました。保護者からみると本当に子どものためかと思われるかもしれませんが、先ほど数名の委員の方も言われましたが、やはり幼児教育で一番大事なのは集団というところを形成できるか、集団を形成できるようにいろんな部分で進めていくのが、行政の一つの仕事であるとその場でも言わせていただきました。強い反感もいただいたと思いますし、色々なご意見もあるとは思いますが、やはり子どもたちのことを考え、集団を形成するというのを考えると、幼稚園が開園していると、数人でも入園してしまうということもあります。実際に入園児が1人とかなった場合は、保護者の方には1人

ですよということを説明させていただいたうえで入園を検討していただきます。保護者の方の思いとして1人でも良いということで入園されることもあります。ただ、近くの幼稚園と一緒にいる機会があったときに、自分の子どもの成長と集団で生活されている子どもの成長を見比べて複雑な思いをされていたということを聞いております。ですので、私どもとしては、今回なぜ15人で閉めていくのかというと、やはり集団を形成するための基本のところを整理していかなければならないということを示させていただいたところが大元でございます。ここを認定こども園にしたらどうかかいろいろな話がありますが、実際のところ委員が言われたように、松阪市の子ども数考えた場合、ある程度の集団を形成するという部分になると、すべての公立幼稚園を認定こども園にしたとしても、逆に子どもさん達の集団という幼児教育の一番大事なところが行っていけないというところがあります。逆にいえば施設数が多すぎることです。実際、津市は19園、早くから幼稚園と幼稚園を合わせて認定こども園にされています。松阪市が2番目の18園、四日市については松阪市より子どもが多いにも関わらず、13園か14園です。鈴鹿市については一桁しかありません。ですので、やはり子どもさんを集団でみるという部分のもとを作っていくということを基本として考えていかないとけないのかなと思っています。松阪市の将来的な構想としましては、「松阪市立幼稚園・保育園のあり方基本方針」の中で、その方向性に基づいて令和3年度に見直しをしまして、次の見直しをするまでの5年間はその方向で行くということで整理させてもらっている状況でございます。

会長

私自身不勉強で申し訳ないですが、今回対象となっている阿坂幼稚園や港幼稚園というのは、こども園化に関して、近くの保育園と統合してとかいう動きは一切ないですか。

事務局

これについては、ございません。先ほどの説明どおり、公立幼稚園で認定こども園に向けて進めていくのは、幼稚園と保育園が近いところにある場合です。阿坂地区に方については、嬉野保育園、港幼稚園の場合ですとつくし保育園に行かれています方が多く、どちらも私立保育園になりますので、そういう話はございません。ここについては、近いところの幼稚園と再編統合する。例えば港幼稚園と鎌田幼稚園ですと距離にして1キロもないところに幼稚園が2園ございますし、鎌田幼稚園は定員85名ほどのところに50名くらいしか入っておらず、受け入れられる枠がありますので、やはりそういった部分で近隣の幼稚園と再編統合でと考えています。

会長

ということは、新たに認定こども園化ということではなくて、近場の保育園なり、私立の保育園なり、近隣地区の公立幼稚園なりに園児さんが移行していくという形で、地域での子育てを保障していくという認識でよろしいでしょうか。

委員

先ほどから幼稚園の地域で子どもは育つという話をさせていただいていますが、私は保育園で働いてまして、保育園は校区というのではなく、保護者さんの預けやすいところに預けていただい

て、私の園の園児さんの中で地域から来てみえる方は半数ほどです。でも地域の方々は温かくて、誰がこの地区の子だからということではなくて、この保育園に通っている子だからというところで温かく見守ってもらっています。ですので、地域で育つということも大切だと思うのですが、自分の住んでいる地域ではなくて、自分の通っている園の地域ということで周りの方も考えていただいているのかなと思います。保育園の子どもたちもその地域の方の優しさとか見守りを受けて育っていますし、小学校になればまたその小学校で地域探検とか学校の授業の一環で自分の地域を知ることがあると思うので、地域ということを見ると、今自分の住んでいる近くということに拘らなくても良いのではないのかなと思います。ただ車を持ってみえない方とかには不便はあるかとは思いますが、どの地域でも温かく育っていけるのではないかと思います。

会長

委員の皆様から出していただいた地域での子育てというようなご意見というか、新たな視点というか、そういったものを与えていただいて、そこでトータルに考えていくというところで、保育園・幼稚園という狭い枠組みではなく、就学前の育ちを大事に考えるということ、それに加えてその園、その園での良さというか、そこで得られること、育つこともあるのではないかな。本当に松阪市全体でというようなさらに広い視野も必要かもしれません。そういった中、いよいよロードマップというところである程度その方向付けという部分がどうしても必要になってくるということは共通認識としてお持ちいただいているかと思います。今までの議論を踏まえすと、やはりその集団でというところでの育ちですね。1人だとなかなか勇気が出せないけど、皆と一緒にいたら例えばプールに顔付けができるとか、社会性の育ちというようなところ、皆に引っ張られて育つところというのは専門用語で発達の最近接領域といいますけど、難しい話は置いておいて、一定の集団の規模というものが、就学前においても保障をされるべきであるのではないかな。そうすると、15名というのはそれなりに妥当な数字じゃないかという認識なのかなと思いますが、よろしいでしょうか。問題は、経過措置というところですね。3年連続で満たせなかったらというところで、この3年という見立ての妥当性というか、連続で1度でも満たせなかったらどうなのか、1年くらい満たせなくても平均値をとるのかとか、いろんな見る基準があると思いますが、その点に関してはいかがでしょうか。実際現状でも学年によって園児の人数もだいぶ違ってたりしていますよね。確認ですが、3年経過措置の見方としては、15、14、15であれば園は続いていくということでしょうか。

事務局

連続ということですので、15、14、15であれば園は続いていくことになります。

会長

連続で満たせなかった、12、12、10とかになってくると、というようなところですが、この基準運用について皆様のご意見というかお考えをお聞かせいただけたらと思います。この運用の仕方、見立てというか基準ならばおおよそ妥当なのではないかというご意見でしょうか。この際ですし、色々な方面から色々な立場のご意見・お考えをお聞かせいただければと思います。3年とか5年とかその妥当なところというのはなかなか決めづらいところはあるかと思います。3が良くて5が駄目とか、

3が駄目で5が良いとかなかなか結論を感覚的なところで決めるとよろしくないとは思いますが、おおよそ3か年計画とか5か年計画とあるように、一つの区切りの年なのかなと、3学年あるというところも踏まえてですね。

委員

言うか言わないか悩んでいたんですが、私の経験で話をさせていただきます。今の港や阿坂の地域や保護者の方がということではありません。私が実際に担任した子の保護者が私にやってきた話をここで披露するというだけの話です。

私がある園にいたときに、当時もう少なくなってきている違う地域から来ていたお子さんがみえました。その地域の保育園には3歳児保育がなかったので、3歳の時に私の園に来ていて、担任をしていました。4歳に上がるときに、その地域の方が一生懸命にその子のお母さんのところにきて、ぜひうちの地域の幼稚園に来てくれないか、「あんたところに来てくれないと幼稚園なくなってしまうかもしれないよ」という話をされました。それで、お母さんはすごく悩まれて、家でもそれを話していたら、お母さんお父さんがすごく悩んでいるのを聞いた3歳の子どもが「僕もう〇〇幼稚園に行くわ」って言ったそうです。私はその話を聞いたときに、本当に子どものためやとか、保育園・幼稚園を選ぶのにこんなことがあっていいのかと私はその時個人的にすごく思って、そのお子さんの気持ちを考えたときに胸が張り裂けそうな思いになりました。で、何が言いたいかといいますと、苦しんでしまう人がいないのかなとか、極端な話、4月1日時点で15人を超えていればいいので、4月には入ります、でもやっぱりかっていうことにならないかとか。私は子どもや保護者の方が苦しんだりするようなことにはなってほしくないの、その辺のところ皆さんの意見を出してもらって、3年連続という部分がどうかというところを考えていただきたいなと思います。でも一つ基準を決めないと地域の方達は順序や、ちゃんと段階を踏んでというところがあると思うので、こうやって決めた基準を提示してということになっていくと思いますので、今すごく大事なところ、方向性を話すためにいろいろな方の意見が必要だと思うので、私も一つ自分の昔話をさせていただきました。

会長

本当に満たさなかったらどうしようとか、本質的なところとは離れたところで親御さんなり、子どもさんなりが何か追いつめられるというか、困ってしまうことがないようにということを見ると、この3年という経過の見守りというか、見立てというのは妥当なのかどうかという、そこに関する問題提起といますか、まずそこを踏まえたうえで皆様のご意見を賜りたいと思いますが、いかがでしょうか。

委員

私の子どもは港小学校に通っていて、5年生、2年生に子どもがいますが、港幼稚園出身の子たちがたくさんいます。その下に4歳、0歳と子どもがいて、今回港幼稚園がなくなるので署名してほしいとのことで、一緒に署名活動をしました。港小学校に行く5歳4歳の子が、34人、24人という人数でこの年は少ないけれど、そのあとは44人、47人、35人と増えています。私の友達は来年の4月に港幼稚園に入れるというのを予定していたところに、いきなり3年ということを言われたので慌てて、色々悩まれて最終5人確保できて、来年は15人を越えるということを知っていますが、3年というの

をもしするのであれば、その地区にいる子どもの人数もみて考えてもらえるといいなと思います。

会長

その地区の子どもさんの数も勘案しながら、いうところですね。単純にその園がということだけではなくて、総合的に考えてどうかという。そこで3年なりという基準は決めつつも、もう少しその園だけではないところの部分もきちんと考慮に入れたうえで、休園なのか、存続なのかということを下丁寧に説明する。全員が納得というのは難しいとは思いますが、致し方がないとか、なるほどそういうことかと納得いただける部分もあるかと思しますので、説明する際にもそういった部分に踏み込んで説明された方がよいのではないかと思います。

委員

ちょっと質問ですが、3年連続の3年とは、当該年度、今年度から3年という認識で良いですか。具体名を出して申し訳ないですが、西黒部幼稚園は5歳児が11人、4歳児が0人で3歳児が4人という、来年5歳児が卒業されたら年長さんがいなくて新4歳児が4人ということになります。3歳から4歳に上がる時には意向確認はあるかと思いますが、保護者の方も情報を早く知っていれば入園前から考えることが出来たし、入ってしまってからで唐突だったり、集団の話とかいろいろな情報を知ったうえで判断できたのかどうか。西黒部の場合、仮にこの4人のお子さんが全員残って上がられて、3歳児が入ってこなかったとき、4人となり15人未満になりますが、3年間様子を見るというのか、どんな状況であっても3年間様子を見るのか、やっぱりその時の状況に応じて、一定の基準は設けるけれど、その時の状況・状況でみてくのか。4人だと家庭のような規模になってきて、1年間その集団の中で関わってもらって先生方の思いもあるし、子どもたちにとってもすごく大事な1年になってくると思うので、総合的に一律に考えるのは難しいのかなと思います。ある程度の一定の基準はいるとは思いますが、学校の規模適正化の検討委員会の中でも一定基準は設けるということで話は進んでいますが、それが一律この広い松阪市全部に当てはまるのかといったときに、そうではなくて1個1個みていかなくては駄目だよという話になっているので、そのあたり、もうちょっと現実的な状況も踏まえて一律の数字だけでは決めにくい部分もあるのかなと、いい意味で子どもたちの育ちや学びを考えて、保護者の思いも地域の思いも、先生方の思いも考えて何かそういった方向付けが出来るといいなと、漠然としていて申し訳ないですが、そう思いました。

事務局

スタートについては15人未満となった年を1年目としてみます。港幼稚園であれば今年から、阿坂幼稚園の場合は本来去年から15人を切っておりますが、私どもの方も去年いろんな部分で動けなかったこともあって、この2園については今年からということです。今後については15人未満を切った年を1年目としてみています。西黒部幼稚園については、実際みてもらってすぐにわかるように年長さんが卒業したら年少4人となります。今回いろんな部分で唐突やったという意見もいただいていますので、今の幼稚園の現状については9月に入ったところで保護者の方や地域の方に説明をさせてもらう準備をしております。特に西黒部幼稚園については東部中学校区となりますが、西黒部幼稚園に通っている4歳児は東黒部地区とか朝見地区、機殿地区から通ってみえて、西黒部の

お子さんは年長さんにはいらっしゃいますが、年少にはみえません。ですので、その説明については、他の地区に向けても現在の状況を知っていただけるよう対応していきます。今後につきましても同じように、15人云々の部分については早め早めに幼稚園の現状を話していくというふうに考えています。射和幼稚園についてももうすでに射和地区の役員さんと、隣の茅広江地区の役員さんに、今の幼稚園の現状とか、ここの将来的なことについて相談をしたいと投げかけさせていただいています。またこれについては保護者の方とか役員さんと相談する中で、情報発信もさせていただきたいと思っています。

会長

難しい問題ですね。園ごとに基準が異なってくると、うちではその基準で休園や存続やとか決められたのに、他の地域では違うとか、そうなってくると不公平感とか出てくるということもありますので、やっぱり一定の基準を一つの原則として、でももちろん様々なこども園化へのながれとか、地域で子育てを保障する機関があるのかとか、その地区の子どもの数のこととか、そういうところをトータルで考えますと、なかなか難しいとか、いやいやまだ可能性がありますよとか、そういう判断や説明を地域の方々には早め早めに丁寧にしていただきながら、原則としてはこういうところでみていきますという説明になろうかと思います。ですので、今回の阿坂幼稚園・港幼稚園についてのロードマップというわけではなく、要は松阪市全域に適用されていくという、その可能性も踏み込んだうえでの今日のお話のかなと思います。原則ってなかなか難しいですよ。原則だと例外はあるのかとかどんどん基準としての定義をなさなくなっていくところがありますが、そうは行っても原則のラインが示されることが受け手にとっても理解しやすいところではあると思います。いかがでしょうか、3年の経過措置というところ、今までの議論を踏まえましてさらに各委員の皆様の見識とかお立場から考えてもまずまず妥当といえるのかどうか。我々だけで決めるのも無理があるのですが、一つですね、この場での意見・考え方をお届けしたうえで市としての方向性が決まってくるのかなと思っています。

委員

この後のロードマップはどのようにされるのでしょうか。この会議で決めた内容をもとに、たぶんまた説明会等を予定されてみえると思うのですが、私たちが今ここで議論していることが松阪市の決定事項としてお伝えされるのか、どういう位置づけになるのでしょうか。また入園申し込みも始まってくると、保護者の方は色々なことを考えて悩まれてみえる方もいらっしゃると思うので、この後の流れとかお考えも聞かせていただきたいなと思います。

事務局

私どもが提案させていただいた内容で妥当ではないかというご意見をいただければ、地域の方々へ来週予定している説明会の中ではこの方向性でお話をさせていただくことになります。すなわち来年度の募集もあるし、令和6年の募集もあるということになります。そのなかで令和6年の結果まで何もしないというのではなく、今回突然だったというご意見もいただいていますので、令和5年の募集が終わった時点でこういう状況になりましたとか、その都度その都度報告させてもらおうと思

っています。港小学校区でいえば、毎年 40 人くらい人数がいる中で、幼稚園に何人来てもらえるかという部分もあるかと思います。阿坂校区でも 10 人を超える時もありますし、他のところ、郊外に行くとも人口は上がったりがつたり下がつたりしていますので、今回のように 1 年で閉めるというのは強引かなというのがありますので、数年みさせてもらう中で、やはり 3 年続いて 15 人を切るような状況であればということです。例えば今子どもさんの人口は毎年 100 人ずつ減ってきています。今年の 4 月が何とか 1000 人を超えていますけど、毎月毎月の 0 歳児の人数をみてもみると、900 人になっている時もあります。ですので、また 1 年後、1000 人を超えているかどうか、幼稚園に入る子どもさんが今現在 17% で減ってきてはいますけど、ある程度そこで止まって推移していけば 15 人というところを超えるかもしれません。ただ松阪から南の地域では保育園の入園希望者の割合がなぜか高いです。北勢の方は 5 割程度ですが、松阪から南の地域では 6 割くらいの方が保育園を希望されています。それには色々な背景があるかとは思いますが、ですので、やっぱり数年間みさせてもらわないと、突然ということにもなりますし、さきほど委員が言われたように、先々のことを見たときに今回 3 年という部分を出す中で、来年の入園はある、6 年度の入園もある。逆に来年 15 人を超せばまたそこから 1 年延びることになる。私どもとしましても絶対に少ない園を閉めていきたいということではなくて、逆にどうやって残していくか、どうやって子どもさんたちに幼稚園に来てもらうかというのを考えていくかというものもあるかと思えます。今回ある園では SNS を駆使して 2 歳児の子どもさんたちを寄せたことで、10 人以上来ていただいて、そのうちの何人かは幼稚園に入りますという話も聞かせていただいています。園でもそういう活動をしていただいているところもあります。ただやはりこれだけ少子化が進む中で人数が減ってくるってなると、集団という部分もありますので、今回の反省を生かして、突然にはならないように、事前の告知等行いながら、1 年間ではなくて数年間の様子を見て、閉園するなら閉園するというのを地域の方々へ説明していきたいと考えています。

会長

長丁場になってまいりましたが、色々なご意見、お考えをお示しいただきましてありがとうございます。今回のメインの議事に関しては、基本の原則としては子どもの育ち、就学前の育ちをいかに保障していくかが大前提としてある中で、やっぱり社会性やスムーズな小学校教育への移行というか、そういったところに繋げることを考えたときに、一定規模の集団というサイズとしては 15 というのはおおよそ妥当なものではないかというところですね。かつ、今回出た意見の中で、その地域での子育てという視点も出していただきました。あるいは、保護者の方のニーズ、通いやすい園に通わせたい、親子ともに困らないということも重要であるというところでした。その中で、今回阿坂・港幼稚園というのが出ましたけど、その地域でどれくらい保育力教育力というものがあるのか、私立の保育園や近隣の園も含めてトータルで考えて保障されるというところ、加えて子どもの全体の数というところも踏まえて、原則 15 名を満たさないことが 3 年連続で生じた場合ということでした。事務局からの説明では毎年度ごとにきちんと丁寧にみて、このような状況でこういうことが続くようだと休園や閉園になりますというところを丁寧に説明していくとのことでした。おそらくその中でさらにはこども園化とか、そういう状況の変化というものも地域としては生じていきたいとか、基本的な方針というのは示されていてそこに変化はないというお話でしたが、やはり地域の状況は変わっていくわけで、親御さんや子どもさんが困らないというところを基本的な軸にして、ある種弾力的にも運用していただくと

いうところですね。ただし、今回のその基準に関してはおおむね妥当ではないかというところだったかと思います。本当に色々考えなければいけなくて、今後のことも含めて問題提起もしていただいたのかなと思います。その中で、今回その一定の基準というのは今後のことも考えて、他の園への運用も踏み込んで、まずまず妥当ではないかということで本会の意見としてまとめさせていただきたいと思います。

5. その他

会長

それでは、議事に戻りまして、事項書の5番目、その他にところで事務局の方から何かありますか。

事務局

ありがとうございました。次回、第31回子ども・子育て会議でございますが令和4年12月頃の開催を考えているところでございます。また開催の1か月くらい前には開催通知を送付させていただきますのでよろしくお願いいたします。事務局からは以上でございます。

会長

ありがとうございました。今回は12月頃ということでまた少し期間が空きますけれど、よろしくお願い申し上げます。その他は特にないということでこれにて本日の会議を終了させていただきます。本当に長時間にわたり様々なアイデア、視点というのを新たに与えていただいた貴重な時間だったかなと思います。またこちらをもって事務局の皆様には住民の方々への丁寧な説明をさらに求めて生きたいというようなところでございます。誠に長時間ありがとうございました。これをもちまして終了させていただきます。お疲れ様でした。